

The Prodigal's Sister 「放蕩息子の妹」
 December 2, 2001
 Part 1

読者へ

放蕩息子を持つのと、放蕩息子になるのとどちらのほうが辛いのか私にはわからない。ただひとつ確かなのは、彼が帰ってきたときには非常な喜びがあるということ。イエスキリストが話された放蕩息子のたとえ話は、神様がどのようなかたであるかということと、神様がイエスキリストを通して帰郷した罪びとをどのように迎え入れるかということについてである。

この話を題材に多くの歌、詩、絵画、祈りが作られてきた。ところが、この家族に放蕩息子とその兄以外に、ひょっとして妹がいた、などと考えた人がいたのだろうか。イエスはこの放蕩息子が一体どのようにして「正気に戻った」のか何も述べなかつた。でも、もしこの頑固者を低めるために、神様が、この世の基準では弱々しい者を使ったとしても、ちっともおかしいことではないのではないのか？

放蕩息子の妹、ハヤネタ。兄を探し出すことを10年間夢見続けていた。遂にその夢をかなえるときが来た。罪深いノアシュの町は、この18歳の美しい少女には安全なところではなかつた。けれどもハヤネタはそこらのありきたりの少女ではなかつた。彼女のもう一人の兄ですら、彼女の使命がまっとうするまでに、彼女の勇敢な愛に影響されるのである。

第一章：死んだ二人の息子

父親の農地から続く道
 それは空だった
 まるで、かつて抱きしめていたものを
 手放してしまった腕のように
 誰かが手招きをする腕のように
 西にしばらく続いたあと、曲がっている
 両側には何マイルも続く小麦畑
 収穫の時期にはさながら天国に続く道のように
 それともイスラエルの民を救うために
 海をわけ、生と死をわけた神の怒りの壁のようか
 初めの数マイルは、なだらかな優しい下り坂
 その後は曲がりくねった落石だらけの道になる
 旅の初めは楽、そして後で辛くなる

一軒の豪邸の玄関先には、日よけ用に屋根がつけられた。
それは十年前、揺り椅子とともに西向きにつけられた。
最近では、老人が階段を上らなくてもいいように
緩やかなスロープも作られた。
膝がいうことを利かなくなってきたから。

家の周りに生えているしだの木が、影をつくっている。
ハヤネタがいつもそうしているように、父親の前の階段に座り
日没か夜明けが、彼女の兄を連れ戻してくれるように祈った。
老人は揺り椅子に座りながら自分の娘を見た。
彼の痛みと喜びの混和の具合を計り、抑制しながら
おそらく父親にしかわからない愛情を持って彼女を見た。
彼女の兄、マノンはどうの昔に
彼が思うところのくだらない快樂
に身を投じることに愛想をつかした。
そしてそのかわりに働いた。
自分は夢見るものたちと一緒に、この西の空の最後の光と
希望が消え行くのを眺めるよりも
自分をもっと充実した人生を送る、彼はそう言い放った。
冷え切って何も感じない彼の心。
父親は泣いた。二人の息子は死んだも同然だと。
一人は激情に飲まれて、もう一人は有毒な労役で。
一人は数百マイル離れて、もう一人は近くにおいて。
一人は欲望と道化の奴隷、もう一人は法律と規則の奴隷。

しかしハヤネタは自由の身。
父親が毎夜祈りながら、声に出さずに兄の名を呼ぶのを見ていた。
それが彼の心を引き裂いているのを見つめながら
彼女は愛することを学んだ。
今夜その心は十年以上前のあそこを彷徨（さまよ）っていた。
彼女が八歳かそこらで、二人の兄と遊んでいた楽しい日々！
今は年老いて、椅子に座って目をつぶって祈る父親が
まだがっかりしていた頃のこと。
二人の兄と秋の枯葉の上に寝転がった父親
その三人を彼女が枯葉とわらで覆った。
彼女がまるで彼らを起こすかのように
飛び跳ねて手をたたくと
三人の男たちが地震のごとく起き上がり
体を揺さぶり手を大きく広げて叫んだ。
「我らのこの少女は死人すら甦えさせられるだろう」

今夜、彼女はその時のことをじっくり考えていた。

十八歳になった今でも、十年前にニクヴァが頬にくれたキスを思い出せる。最後のキス。「ニック、行かないで」と彼女が行った時涙が彼の頬をつたった。彼の腰に抱きついた。今出なければ、とでもいうように彼は急いでその場を離れ、森の中を去っていった。立ち止まって、泣いて、そして空の道を彼の家族から、育った家から離れる西に向かう道を急いで行った。だれにもわからなかった、どうしてこうなったのか。おそらくは、彼自身も。圧倒されたかのようにだった。彼の場所は空のまま。彼女は彼の顔を見ないまま。

十年という年月は、少女を女性に変えた。しかし時が経つのを無視するかのごとく、変わらないものもあった。ハヤネタがいつかやり遂げようと決めたその心は彼女がその小さな手を暗闇に伸ばしたあの夜から少しも変わっていなかった。「ニック、必ずあなたを見つける。約束する。いつか死んだようなあなたを見つけて生きて連れて帰る。」

老人は頭を少し上げて、西から東へ動いた影が誰のものなのか見ようと目を開けた。彼女は言った。「堅実で忠実なお父様、お父様のニクヴァに対する愛は木に刺さっている大釘のように私を強くしました。この愛は、あなたが私を愛する愛を覗いては私が知っているどの愛情よりも強いものでした。そしてこの愛は何年も耐えてきたのを私は知っています。私は十八になりました。私が今からしようとする使命を祝福していただけませんか？私がまだ小さいころにニックが出て行ってしまってからずっと、このことだけを夢に見て計画してきたのです。ニックを探し出して、まだ家に帰って来れると

教えてあげたいのです。」

老人はまるで眠りについたかのように
その弱々しい目を閉じた。そして言った。

「まるで君の母親が話すように話すね。
彼女なら、君の燃えるような情熱にさらに火をくべ
鉄の盾と剣を持たせて、喜んで送り出すだろう。
君と君の成し遂げようとするこの間にたちはだかる
どんな邪魔者でも、たとえそれが竜でも
切り捨てることができるように。」

老人は微笑んで続けた。

「だがね、ハヤ、彼女はもういないんだ。
彼女自身、良く戦ったものだ。全ての竜をたたき切ったんだ。
ただひとつ、高熱という敵だけには勝てずに死んでしまった。
娘よ。ニックを取り戻すために、私は
君の命を捨てなければならないのか？
女として生まれた君が、そんなことをするなんて、
ニックが住むところに行くなんて危険すぎる。
私は何度も足を運んだ。
あそこの輩が何を欲し、何を飲み、
女たちに何を言っているか考えるだけで
私の心は震え上がる。ハヤネタ、
ニクヴァは君が覚えているような青年ではないんだよ。
彼は変わってしまったんだ。」

「お父様、そのような不愉快なことは全て知っています。
彼が変わってしまったことは私にでもわかります。
でも、それは私たちも同じことです。
十年間の祈りはけっして無駄ではありません。
変わらないものもあると、お父様から学びました。
優しい奮闘、そして私が彼の最後のキスを忘れられないように
彼も私の最後の抱擁を覚えているはずです。」

そしてお父様、
何にもましてお父様に教えられたことがあります。
愛の力に対しては、
何もぶつかってくることが出来ないということです。
そしてその愛の力は真実と勇気が語られるところ
にあるということ。そして恐れと沈黙以外には、
若年も老年もそれを邪魔することは出来ないのです。
私が六歳の時になくなったお母様が

『ごらん、まるで子供が家に帰ってこられるように

神様が敵対するすべての者の背中を砕くみたいでしょ。』
 といってポキッと折った枝を私は今でも見詰めています。
 お母様なら、行かせて下さると思います。」

「ためらわずにだ、娘よ。彼女ならためらいもせず
 君を行かせたろう。」

「お父様は？私は、お父様の祝福の手をこの頭（こうべ）に受けなければ
 この使命を成功させることはできません。」

老人は暗くなってきている西に伸びる空の道と平野を見た。
 そしてこの少女に何を望んでいるのか考えた。
 ついに震えながら空の手を上げ賛美した

彼女の心には恵みと勇気があった。

そしてさらに祝福が分け与えられた。

老人の右の手が彼女の頭にそっとふれた。

「今、暗闇を征服せよ。勇敢な娘よ。

あなたが人間の想像を超えるほどのよき知らせを持ち来たらんことを。

私はあなたがここに、この場所に戻るまで

あなたの誓いを共にする。

私の息子たちとまた生きることを願う。」

<呼びかけ>

待ちくたびれて、疲れ果てた心よ、
 望みを捨てるな、泣くのをやめるな、

月々が数年になり

数十年涙を流し続けても

忘れないで

少女は

いや、ひよっとしたら少年も

誰かの身（からだ）の中で

念密に計算されたかのように

紡ぎ合わされているのかもしれない

そして夕方の暗闇を打ち破るために生まれいで

今まであなたが想像もしなかった

話にも聞いたことがなかったほどに

あなたの暗い空を照らす光になり

あなたの深い叫びと願望の答えになるだろう

翻訳：愛咲えみ